

留学先からのレポート

Kazuya Kawakami

Carnegie Mellon University

www.kazuya.kawakami@gmail.com

11/2014

カーネギーメロン大学コンピュータ科学科言語技術研究所に留学している川上です。やっと試験が終了して一息ついているところです。授業に研究にと忙しかったものの、充実した1学期を過ごせたと思っています。研究成果も出てきたので、来学期には論文を書けたらなと思っています。一方、私生活の方は微妙です。前評判のとおりピッツバーグという街は本当に何もなくて、東京を体験してしまった若者にはあまりにも退屈な街です。ここで20代を終えてしまうと焦るばかりです。本レポートでは今学期の体験やここ数ヶ月で感じていることを報告します。各章読み切りタイプなので、4章だけでも目を通していただければと思います。

1 海外移住は甘くない

日本を出る前、僕はいろいろ甘く見ていた。出発前日までなにも準備してない様子を見て、あれも買って行きな、これも買って行きな、と家族や友人が忠告してくれていたが、僕はなるべく少ない荷物で、ふらっと日本を離れてやろうと考えていた。食料は買えばなんとかなる。服も買えばいい。コンピュータ科学専攻の学生っていうのは、パソコンとパスポートさえカバンに入れておけばどこでもいけるんやでえ。と本当に思っていた。ところが、そういうことを言っているのは東京に住んでいたからだと到着してから気づいた。ピッツバーグという街は全米の住みやすい街ランキングの上位常連だが、なんとなくさびれていて、デパートに行っても欲しいものを見つけられなかったり、店員すら見つけられなかったりする。これはアメリカのどこでも当てはまるかもしれないが、何を買うにも車やバスで遠出しなければならないし、買ったとしてもバランスボールに穴が空いていたり、奮発して買った50インチのテレビを喜んで開封すると画面がバリバリだったりする。アメリカを甘く見

ているところになってしまうので、日本のような便利な生活は忘れて、期待値を下げて、万全の備えをしてアメリカに入国したほうがよいかもれない。

やっとのことで生活に必要な買い物をすませると、次に食事が気になってくる。日本にいたころ、留学を終えた人たちが「食事が...」などといっているのを聞くと、またまた甘えたこと言っちゃって。と思っていたが、体験してみると思いのほか気になる。やはり食事が微妙だと気分が乗りにくく、日々の楽しみがだいぶ減ってしまう。一人暮らしをはじめたばかりながら、日本の3倍は値段のする日本食スーパーでいろいろ買い揃えて自分なりに美味しいものを作っているものの、社会人になった大学の同期たちが Facebook や Twitter で見せつけてくる美味しそうな料理の写真みるとやはり羨ましい。最近あまりに食事の文句を言いすぎて日本から美味しいものを送ってもらえるようになった。4日くらいで届く 2kg の国際便にいろいろ詰めてもらうのがとても楽しみだったりする。いくら外国にかぶれようとおもっても、やっぱり日本人なんだな...と思うとちょっと残念だ。

とりとめのない日記のようになってしまったが、要するに、海外移住は甘くない、ピッツバーグは甘くない、ピッツバーグはなんもない、という話である。

2 学校生活・研究

僕はカーネギーメロン大学 (CMU) 言語技術研究所に修士の学生として留学している。博士課程に進学する前に修士をとる大学院はそれほど多くないが、ここでは外部からの博士を毎年3人から5人ほどしかとらないかわりに、修士を30人くらいの採用し、博士進学希望者のうち7割くらいを2年後に博士にコンバートするような仕組みになっている。博士を採用するには、事前に博士課程分の学費を指導教官が確保しなければならないが、それはちょっとリスクが大きいので、ひとまず修士で入れておこうという仕組みらしい。通常の博士課程は5年から7年だが、ここでは修士で入学して2年+博士3年から5年というように進学していく。そういうわけで、他の大学の博士1-2年目のように、授業と研究を並行してすすめるようなカリキュラムになっている。

他の留学生の方も言っているとおり、授業の負担はかなり大きいですが、指導教官も含め教授陣は「成績なんか誰も気にしないから研究をやれ」と言ってみたり、「授業でAばかりとるやつは全然研究しないから嫌い」と言ってみたりしている。だったら宿題を減らしてくれよ、と思いつつ、僕も授業の負担は最低限でかわしながら研究を進めているところである。今学期は授業を3つ、指導教官との個人ミーティングが毎週1時間、研究室の全体ミーティングが毎週2時間というようなスケジュールで過ごした。

研究活動自体は日本にいたころとほとんど変わらず、特に違和感なく研究をすすめることができ

ている。改めて感じるこちらの大学院の特徴といえば学生の多様性である。日本では一般的に、同じカリキュラムを歩んできた同い年の学生が同期になることが多いが、こちらでは他大学で修士を取得し、すでに豊富な知識と業績をもっている学生がいたり、数学や物理学科出身、あるいは Amazon や IBM でのエンジニア出身という人がいたりする。ちなみに、19 歳で 1 つ先輩というすごい人もいる。僕の研究室の同期は数学が強いことで有名なフランスの Ecole Polytechnique の数学科出身で、数式を見るやいなや間違いを発見できる魔法のような能力をもっている。彼と一緒に数式を展開しながら話すのはとても勉強になって楽しい。ただ楽しいだけではなく、僕のほうも数学を勉強しようという気になるし、何か別のことで貢献しよう、と頑張れるのでよい刺激になっている。研究室の全体ミーティングでは、それぞれの得意分野を 30 分ほどで説明するプレゼンテーションが毎週あるが、そういうところでいろいろな人の得意技を知るのがとても楽しい。こういった多様性から生まれる新しいアイデアも少なくはないと思う。

そんなこんなで学校生活はとても楽しく送っている。来年にはまた博士課程に出願するための SOP を書いたりしなくてはならないと思うと吐き気がするが、TOEFL や GRE はもう受験する必要はないらしいので、業績を積むことを目標に頑張っていく予定である。

3 浮気・そして破局

入学して 2 週間ほどたったころ、すこしまずい状況に陥った。僕は若い人が好きなため、何人かの若い人に手を出していたのだが、図らずも数人に思わせぶりな態度をとってしまったばかりに、その後、ある方と連絡が取れなくなってしまった。その方とはいまだに気まずい状態がつづいている。

この背景を簡単に説明しておく。大学院の博士課程に合格すると、すでに指導教官が割り当てられていることが多いが、修士の場合、事前に受け入れの指導教官が決まっておらず、入学直後に指導教官と学生のマッチングを行う Marriage Process というのがある。気になる教員との面接を自分でセティングし、それを踏まえて学生、教授陣がそれぞれが希望のリストを提出、マッチングが行われるという仕組みである。下手をすると自分の研究とは全く関係がない、とんでもないところに配属されたりするのでみな必死で取り組むことになる。ここでは、単に研究テーマ、教員との相性といったことだけではなく、400 万円を超える学費を払ってくれる教員かどうか、といった少しドロドロしたことも考えなくてはならないので厄介である。たまたま新しいプロジェクトが始まって 5 人の学生を受け入れる教員もいれば、たとえ人気の研究室でもお金がなく、奨学金のない学生は 1 人も取れないということもあるので、学生同士でも希望の指導教官がお金を持っているのか情報を出したり、出さなかったり、プチ情報戦争が繰り広げられる。もうお分りのことかと思うが、浮気といっても別に

愛だの恋だのという話ではなくて、指導教官を決める Marriage Process でのことである。

僕が罪深いことをしてしまったのは、この面接でのプロセスである。僕は若い先生のほうが好きなので、30代の若い先生3人に希望を絞って面接をすすめていた。第一志望の Chris Dyer 先生は研究内容がぴったりだが、学部30人のうち10数人が希望する人気の教員で配属されるかわからない。第二志望の A 先生(仮)は研究分野は異なるが、とても面白い研究をしている。第三志望の B 先生(仮)はとても面白い研究をしているが、今学期まで別の大学の教員で1月まで CMU にいない。というような状況で、甲乙つけがたい状況だった。僕が Chris 先生のあまりの人気に怖気付き、第二希望の A 先生にもかなり熱心にアタックしてしまったのが問題だった。あまりに熱心に研究テーマをディスカッションしていたため、第一志望だと思い込ませてしまったらしい。当初の希望順どおりにリストを提出し、Chris 先生からの内定を勝ち取ることができたわけだが、僕が裏切ったことになってしまったのか、それ以降、A 先生と一切連絡が取れなくなってしまった。先日、エレベーターで一緒になってしまったが、ひどく気まずかった。思わせぶりの態度はほどほどにしないでほしい、と学んだ。今後はこのようなトラブルにならないように注意したい。

Google 先生が ”川上和也 浮気” のような検索ワードを用意しないことを一応祈っておく。

4 まとめ：留学という選択

最後に、アメリカ留学という選択について簡単に振り返っておきたい。ひとまず断っておくと、僕は留學生活にとっても満足している。しかし、留學前にはそれほど重要でないとおもっていたことが予想以上に重要だと感じるというようなことが起こっているの、ということが起こっているのか簡潔に振り返っておきたいと思う。

まず、留學してよかったと思うことは、多様なバックグラウンドをもった学生と出会えたこと、新しい教授陣と出会い、話すことができるようになったこと、新しい教授の紹介などで自分だけでは知り合うことのできない人と会う機会を得られていること。だと思う。基本的に学業の面ではプラスしかない。

一方、先に述べたとおり、生活のクオリティ低下というのが思っていた以上に気になる。住居は広くて良いところを見つけられたが、衣食の部分に問題がある。 ”留學したならそういうのは忘れる” という高尚な人もいるかもしれないが、結局一人の人間なので、生活の基礎的な部分の揺らぎが全体のバランスに及ぼす影響は少なからずあることは忘れてはいけないと思う。

もう一つ気になっているのは、都会から離れてしまったことによる機会損失がかなり大きいということだ。アメリカに来たことによって、専門分野でのチャンスは広がってきているように感じるが、

それ以外の分野でのチャンスというのは掴みにくくなっていると思う。東京にいたころは、興味のある企業や面白そうなイベントがそこらじゅうにあり、専門分野に限らず積極的に動けば動くほど情報がはいつてきた。一方、ピッツバーグにはそれほど企業も多くな、人脈もあまりないので、Googleで開かれるセミナーに参加したり、大学に採用活動にくる企業の方と話すくらいしかできず、未だに勝手がつかめていない。大学にはとても満足しているが、シリコンバレーでない、ニューヨークでない、東京でない、ということによる機会損失はかなり大きいのではないかと焦りを感じている。そもそも日本人、ということによって他の人より成功の道は狭くなっているわけだから、人の2倍、3倍貪欲にならなければならないと改めて思う。

とにかくレベルの高い大学に入りたい、研究を充実させたいという受験生の視点から、一歩引いて、研究以外の人生設計をどうするのか、生活がどのように変化するのか、と考えておけば、もう少し正確に今の状況を予測できていたと思う。残り7年の20代をどう過ごそうか、もう一度棚卸しして、作戦を練り直す必要があるように感じている。